

かんざし

かんざしの歴史は縄文時代から始まります。



その昔、日本では先のとがった一本の細い棒に、呪力が宿ると言い伝えがありました。そして、その棒を髪にさすことで魔除けになると信じられてきました。奈良時代に入ると髪飾りは次第に「かんざし」と呼ばれるようになり、一般的に使用されるようになったそうです。



10月8日、修学旅行の最終日は、お団子に結んだ髪に、束ねず流した髪に、思い思いの髪型にかんざしをさしました。無事に最終チェックポイントに戻るよう魔除けの意味で、ということではないのですが。着物をまとった



三年生はどこか大人びて、どこかあどけなくて、いつもは見せない表情です。女将手縫いの横断幕に見送られながら、京の街へと歩み始めました。慣れない草履と路面のこすりあう音がとても新鮮でした。

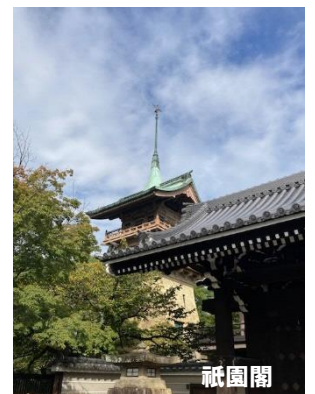


7日(二日目)は京都班行動。班行動の予定を見ると、伏見稲荷、清水寺、三十三間堂、金閣、銀閣、と有名処を巡っています。オーバーツーリズムでいずれも混雑。小生は、敢えて混雑を避けるように、八坂神社、大雲院、ねねの道を経由して、清水寺をチェックポイントとする班に巡り合うべく、徒歩で向かいました。大雲院は非公開なので、塀越しですが写真に収めました。「金閣と銀閣があるんだから、銅閣もあるのでは」京都を旅する人のうち、何人かはそのようなことを考えるでしょう。実はこの写真の楼が「銅閣」なのです。正式名称は「祇園閣」ですが、屋根に銅板を使用しているため、「銅閣」と呼ばれるようになったようです。事前集会で聞いたところ1名の生徒が「銅閣寺」の存在を知っていました。京都マイスターですね！金閣・銀閣と異なり、歴史は浅く、明治から大正にかけて活躍した経済人・大倉喜八郎が別荘地内に建設を計画しました。喜八郎が「金閣寺・銀閣寺があるのなら銅閣寺をつくりたい」と自分の夢を実現させたと語り継がれています。喜八郎の言葉を綴った記録はないものの、夢を現実に変えるエネルギーをもっていたことは、まぎれもない事実です。



7日の夜、「着物講話」を聴くために大広間に集まった際の生徒の脱いだスリッパをご覧ください。整然としています。着物というと、七五三、成人式、挙式など儀式において心を落ち着かせ、凛とした形で着飾るイメージが強くなっています。生徒達には凛とした姿勢が、そして、着物を羽織る準備ができていたのです。心は行動に現れます。

音楽祭、修学旅行と大きな行事が終了しました。3年生は、進路選択に向けて準備をする時がきました。一本の細いシャーペンの先に呪力が宿ることはありません。凛とした姿勢で準備を進め、夢を現実に変える実力とエネルギーを蓄えるのです。



3年生がこの先の人生を どう書く か、楽しみです。